

明日の元気のために

ファド歌手 月田 秀子さん



▶417◀



「悲しいテーマを歌いながら、メロディーの底に、生きるためのエネルギーが漂っているのがファドの魅力」と語る月田秀子さん(東京・汐留の共同通信社)

生きるすばらしさを伝える

震災の悲しみ乗り越えて

ファドはポルトガルの民族歌謡です。フランスのシャンソンやイタリアのカンツォーネと並んで、日本の演歌のようなものです。ファドという言葉は、ポルトガル語で「運命」とか「宿命」を意味します。

(1995年1月の阪神大震災の翌日、大阪・心齋橋でライブを開いたことがありました。こんな時には誰も来ないだろうと思っていたら、やるせない気持ちを抱えた人たちが会場がいっぱいになりました。

ファドが生まれたのは19世紀のポルトガルの港町。リスボンに留学して、ファドの女王といわれた大歌手、アマリア・ロドリゲス20〜99年から、ポルトガル人の「ALMA(魂)」を持っていて高い評価を得た。今回の東日本大震災で受けた人々の悲しみを、どう歌うことができるのか?

今回の震災は被害の規模があまりにも大きく、多くの人たちが、家も命も津波にのみ込まれてしまいました。ファドには、漁に出かけたまま戻らぬ夫を待つ妻の気持ちを歌う「暗いほしけ」という曲があります。アマリア・ロドリゲスがフランス映画「過去を持つ愛情」の中で歌い、世界的にヒットしたのですが、この曲を歌うと震災という目の前の現実

に圧倒され、涙が出て止まりませんでした。非力な自分が歌ったところで何になるのだろう。こう思いながらも、人は悲しい歌を聴いて涙を流した後、明日は元気になる、と考えて、歌い続けているのです。

この6月に3年ぶりにリスボンを訪れたのですが、街中にファドが単なる観光のツール(材料)として氾濫しているのには驚かされました。石畳の路地という路地にテーブルと椅子が置かれ、レストランになっていて、イワシを焼く煙が立ちこめる中ファドが流れているのです。若者がファドを歌って生活が

成り立つ時代が来るとは思いませんでした。自分が暮らしていた時のファドは生活から出てくる騒がしさだったのに、今のファドはただの騒音としか感じなかった。

ファドの普及に尽くしたとして昨年10月、ポルトガル大統領からメリト勲章を受けた。体調が優れない中で、日本各地で小さなライブ活動を積み重ねている。

そろそろ引退しようかなと思つて、千葉の房総に小さな家を買いました。海つてすばらしいから…。そうしたら叙勲の知らせが届き、引き返せなくなりました。

ファドを通してポルトガルを紹介し続けたことが評価されたのですが、ファンの皆さんが喜んでくださったから良かったというのが正直な感想です。自分の歌を聴いてくれた人から「ポルトガルへ行きたくなくなったよ」と言われるとうれしい。

実は3年前から線維筋痛症という治療が難しい病気に悩まされています。髪が風に吹かれただけで、一本一本が痛い。胸に、くいが打ち込まれるような気分になり、生きる気が失われていく。それでも薬で何とかコントロールできるようにまりました。

私が今住んでいるところは大吹崎の近く。ここは、ある意味でユーラシア大陸の東端です。ポルトガルのロカ岬はその反対の西端に位置するということで、両岬に友好の記念碑が建っているのです。不思議な縁ですが、これからも、生きていることすばらしさを伝えるため、ファドを歌い続けたいと思います。(聞き手は共同通信編集委員、上野敏彦、写真 藤原英)

つきた・ひでこ 1950年東京都生まれ。立命館大文学部を中退し、大阪で新劇女優、シャンソン歌手をするうちファドに巡り合った。87年から国立リソボン大学へ単身、留学。現地の劇場でファドを歌う日本人歌手として注目された。日本各地やリスボン、マカオでライブ活動を続け、CDは「ファド」月田秀子ベストアルバムなど。